

現代ドイツにおけるネオナチ・ユーゲントの文化(1)

増 井 三 夫*

(平成7年4月28日受理)

要 旨

1989年のベルリンの壁解放から始まったドイツ転換期は、その時代状況の激しさを反映するかのように、ネオナチ・ユーゲントにそのラディカルな行動を示威する舞台を提供したかのようにあった。もちろん観客も揃っていた。その観客は若者たちの難民収容所への襲撃に潜在的な支持を表明した。さすがに世論は、この行動が一部の若者の一犯罪としてすますことができなくなった。抗議のデモが続いた。その一方で、ネオナチの登場は失業等の社会的な危機と精神的な危機に起因するといった従来の行動格率を適用することによって説明されていた。そこでは危機の要因が多数指摘されているが、そこから明かとなった点は、その要因の数だけネオナチ・ユーゲントの行動生成の過程が複雑であったということである。この複雑な過程に一つの解釈をあたえるために、ネオナチの行動へはしる若者の日常生活世界に注目したのが本小論である。だがそのデータが極めて不足しており、この試論は今後の研究の進展によって修正を不可欠とするものである。

KEY WORDS

東ドイツ DDR 極右主義 Rechtsextremismus ネオナチズム Neonazismus

はじめに

1. ネオナチ・ユーゲント文化「解釈」の可能性
2. 転換期前後の若者の日常生活世界
 - (1) アイデンティティ「危機」・方向性「喪失」
 - (2) 崩壊が進む家庭生活
 - (3) 学校内暴力の日常性
 - (4) 価値多元主義にたいする不適応(第15巻第1号)
 - (5) 「最高の価値」の実行
 - (6) 強力な世界観への志向
3. ネオナチの組織と行動
4. あるネオナチ・ユーゲントの日常性

おわりに

はじめに

ドイツの転換期における若者文化といえば、だれでもがすぐに世紀末のワンダーフォーゲルを想起するであろう。それは周知のようにベルリンから始まった。その郊外にあるシュテグリッツこそがその地であった。筆者も1992年の晩秋にこの地にたち、その若者たちが徒歩旅行を企てたグリュネヴァルトの湖畔と森にも足を運んだ。そこは、秋には紅葉が美しく、冬には神秘的な黒白の色彩に覆われ、いまだに往時の自然のままの面影を伝えているようであった。遊歩道を散歩するベルリン市民に自然回帰というテーマは今でも息づいているように思われた。そうした世紀末に活動した若者の文化は、上山安敏によると、「既成の秩序から脱出して鬱積した衝動を反時代的行動と風俗によって示威し」、「人間として現代のわれわれの心の中ですでに無意識の世界に忘却されたかに見える存在的衝動を現実の日常生活で吐き出し、言語化し、行為で表現」するものであった⁽¹⁾。

ところで1980-90年代の転換期ベルリンはまた同時に極右・ネオナチが跳梁する場でもあった。1992年11月9日のZDFは電話による世論調査を放映していたが、それによるとネオナチが将来の危機のトップにあがった。ネオナチに対する危機意識は非常に拡がっている。そのネオナチ・ユージェント（若者）たちの行動もまさしく「反時代的行動と風俗によって示威」するものであった。だがかれらの文化は、ベルリン市民の「心の中にすでに無意識の世界に忘却されたかに見える潜在的衝動を現実の日常生活で吐き出し、言語化し、行為で表現」するものであったのであろうか。それともかれらの日常生活世界とベルリン市民のそれとはまったく異質であったのだろうか。かれらの価値観・思想および情念とドイツ市民のそれとが共有することはありえなかったのだろうか。

1993年に筆者はヒットラー・ユージェントの歴史社会学研究で知られるベルリン自由大学教授H. ショルツ博士ご夫婦（夫人はギムナジウム化学教師）にネオナチについてインタビューするチャンスをもったが、博士は、これを一部の若者が極右主義リーダーによって扇動された個別的な現象であると説明し、夫人もこれに賛同していた。筆者は、ベルリン滞在以来新聞・雑誌でネオナチについて情報を収集していたのでこの説明には納得できず、さらに次のような質問を続けた。「たとえ扇動されたとしても、その若者にイデオロギーについて少なくとも共感することがあったのではないかと」。博士の返答は、「そんなことはありえない」であった。このような回答は別の機会に比較社会学者ハミット博士からも聞いていた。さらに博士は筆者にたいして「日本にも右翼がいるではないかと」、突きはなすように、述べていた。

筆者には、このインタビューで、ベルリンの知識人には外国人があからさまに極右・ネオナチについて問い尋ねることを一見拒否するような雰囲気漂っているように感じられた。筆者はこの拒否を、時間がたつにつれ、なんとも了解しがたい不条理と思うようになった。こうした知識人の理解は、少なくともベルリン市民のそれをも反映しているのではないかと、ネオナチはこうした世界を敏感に感得しているのではないかと、随分と飛躍した、また乱暴な推論を思い描くようになった。その背後には、たしかに、ある種の筆者の偏見があったかもしれない。だがそれも「ドイツの内面性の歴史」を問うたトーマス・マンの反省にこだわったものであった。マンは「ドイツの国粹主義的熱狂の狭量でやりきれないところ」または「ドイツの心情と悪靈的なものとの密かな結びつき」を指摘し、それがドイツの「陰鬱な歴史」であると同時に自分

自身の身体にも同居するものであったと述べていた⁽²⁾。

1992年12月31日／1993年1月1日の『デア・ターゲスシュピーゲル』紙は「1992年、外国におけるドイツ像」を編集した。その東京発信記事は、日本企業がドイツへの投資に逡巡をしめす理由はドイツにおける極右にたいする不安からであると説明される、しかしこれは日本のジャーナリズムの軽率な報道に起因する、もともと日本はドイツの外国人排斥に対する道徳的裁判官になる資格をもちあわせているのか、という内容のものであった⁽³⁾。これを一読して、筆者はあの不可解な拒否的対応をいまや不条理そのものと思わざるをえなくなった。筆者は、そのとき以来、短い期間ではあったが、こうした同時代感覚からえられた不条理とこだわりになんとしても一つの決着をつけなければならないという思いを抱き続けてきた。

1. ネオナチ・ユーゲント文化「解釈」の可能性

社会的・精神的危機要因

ネオナチ・ユーゲントとは何か。ここではその用語を望田幸男の規定⁽⁴⁾を参照して次のように示しておきたい。合法・非合法を問わず、極右主義・ネオナチズムを志向する極右グループの若者と総称し、極右政党をここに含めない。さて、ネオナチの活動は旧東ドイツ(DDR)の崩壊・ドイツ統一(1990年)後に初めて世界のジャーナリズムの紙面に登場したが、すでに旧東ドイツ時代の1980年代後半期に「最盛期」をむかえていた。だが、後述するB. ジーグラウを除いてネオナチ研究は統一後のドイツの状況に絞られている。

坪郷寛の論文「戦後ドイツの極右主義と共和党」は、「極右主義のイデオロギー」を簡潔に整理し、「現在の極右主義という政治現象を総合的に分析するためには、極右主義の様々な組織・集団行動やイデオロギー要因のみならず、極右主義的態度や意識のレベルをも考察対象にしなければならない」と述べているが、その考察対象を「政治現象」としての極右主義政党に設定している。その分析の射程は、選挙における極右政党の支持率より国民の極右主義にたいする「支持者像」、「極右政党への支持を引き出す社会的政治的条件」および「既成政党」の「有権者への統合力」の解明に置かれている⁽⁵⁾。高橋秀寿の論文「今日における極右現象の歴史的位相」⁽⁶⁾も坪郷の分析枠組ないし方法を支持するものである。

この立場はいわば今日まで極右主義研究の大勢をしめるものであったが、政党と支持者間の相関は推定されえても、ネオナチ・ユーゲントの行動発生因を解明するにはいまだ不十分であるといわなければならない。その欠陥を補うには、坪郷が指摘するように、「青年のサブカルチャー」と極右主義との関係を探ることが不可欠である⁽⁷⁾。その分野の代表的な研究者はW. ハイトマイヤーである。

「極右主義のエキスパート」でドイツ社会民主党(SPD)の理論家でもあるビューレフェルト大学教授ハイトマイヤー(教育社会学)の理論は「危機社会」論(W. ベック)に依拠している。その「危機社会」論によると、「近代化の危機」は、環境汚染・核汚染といった「地球規模で迫る脅威」と「生活状態の個別化」に及んでいる。とくに後者の点にハイトマイヤーは注目した。ベックによると、伝統的な社会的絆(近所づきあい・運動クラブ等々)と「人に義務を負わせる力が弱く」なり、それが個人の「個別化を推進」した、その結果個人は「自分自身と、危険・チャンス・矛盾が渦巻く労働市場での個人的な運命とに身を任せざる」をえなくな

る。ハイトマイヤーは、ベックの説明に依拠して、若者が「行動における自信のなさ」「無力感」「個別のばらばらな体験」に陥り、それが「極右主義イデオロギーと結びつく糸口」となっているとみている。ハイトマイヤーはこの説明枠を補強するために、さらに「欠損理論」を動員している。「欠損理論」とは、「失業と生きる指針の喪失と将来への不安」といった上記の「危機社会」では「個人は必然的に〈アイデンティティの危機〉に見舞われ」、これが極右主義につながる、とみるものである⁽⁸⁾。この立場は、繰り返すように、「経済的悲観主義とナチズムへの共感という要因の結合」に注目する⁽⁹⁾坪郷と同一のものであるとよい。

こうした外的要因説に対するもっとも本質的な批判は、ジグラーが指摘するように、「客観的な〈外的〉要因が特定のグループでは外国人敵視につながり、その他のグループではそうならないのはなぜか」という点である⁽¹⁰⁾。この批判を支持する立場は内的要因説である。そのなかでも社会心理学的アプローチにまず注目してみよう。

熊谷徹の現地での丹念な取材をもとにした分析はこの立場を代表するものである。かれはとくに旧東ドイツの若い世代の価値観の崩壊に注目している。以下でそのポイントをあげてみよう。(1)「価値観の真空状態」—社会主義時代の価値観である「義務を守り、規律に従い、集団に順応する」は、国家の意思で指令されたものだが、その崩壊後「こうした義務」である「東ドイツ的な価値」は「ことごとく否定された。」⁽¹¹⁾、(2)「せきとめられた感情」—「社会主義体制への順応を強制され続けた結果、感情を素直に表現することができなくなっている」⁽¹²⁾。(1)の結果、若者たちは「方向性を失い」、「価値観の真空状態を埋めるために、そして自分が従属できる権威をみつけようとする」⁽¹³⁾。(2)の結果、「抑圧体制の下で生まれた感情を表現せずに内部に閉じこめたままにしておくことは」「病気を生じせしめるか「他の人間を悪者にしてはけ口を求め」させることになる⁽¹⁴⁾。熊谷はこの心理的な結果が、(1)について「西側からきたネオナチの指導者たち」によって若者が組織される要因となり、そして(2)については「旧東ドイツで外国人への襲撃が増え、極右勢力が拡大する背景」となっているとみている⁽¹⁵⁾。熊谷は、もちろんこの心理学上の要因で旧東ドイツにおける極右・ネオナチの急伸長を全て説明しているのではなく、旧東ドイツにおける「反ナチス教育の欠陥」に伴う潜在的な反ユダヤ主義・反外国人意識の実態を独自の調査を交えて詳述し⁽¹⁶⁾、極右・ネオナチにこの双方の要因がストレートに結合されている、とみている。

「世界像」への注目

行動生成因の抽出は、以上のように、必ずしもこの諸要因とネオナチ・ユーゲントとの相関を説明するには至っていない。しかし、この相関を説明する有力な解釈が勿論ないわけではない。それは、社会的危機・精神的危機とナチズムの結合がはたされたときに、若者の社会的行為がネオナチの行動へ転化する、と理解するものである。仲井斌はこの解釈を代表する。かれによれば、双方の危機は確かに若者を「ラジカリズム」にはしらせる、だがその方向は必ずしも右翼「ラジカリズム」のみならず、左翼「ラジカリズム」にもむかう、現に「68年世代」とよばれる学生運動は後者に属している。それでは若者が右翼「ラジカリズム」を志向した条件は何であったのか。仲井はさらに続けて次のように指摘する。「統一後の極右は、(「68年世代」と：引用者) 現体制を否定するという点では同じだが、「だがかれらがナチズムを再発見し、その『理想』の実現を夢見るとき、目標なきゲヴァルトは政治化せざるをえない」と⁽¹⁷⁾。

望田の解釈も仲井とほぼ同様である。望田は、スキンヘッズとネオナチを区別し、さらに前

者が後者の「社会的培養体ないし予備軍」であるとみていた。だがそのスキンヘッズの「世界像」は「とりとめのない観念や怨念の集合であり、敵対的なものと思われた社会集団に対する対抗行動によって表明され」ており、ネオナチズムとは距離があった。そのスキンヘッズがネオナチへはしりまたは組織される契機は、前者の「世界像」の「底流」に「極端なナショナリズム、人種主義、反ユダヤ主義」といった「ナチズム的なイデオロギー」が志向されている場合である⁽¹⁸⁾。

仲井、望田ともに、ネオナチ・ユーゲントの行動は世界観志向的な行動であったと理解する点で共通している。だがそればかりでなく、次の解釈にも共通性が認められる。すなわち、ネオナチ以前の右翼「ラジカリズム」またはスキンヘッズにも「世界像」が明確に認められている点である。前者のそれは「方向を失った後者集団（「極右青年グループ」：引用者）にとっては、時としてゲヴァルトそのものが目標であり、そこにはアイデンティティの確認行為が隠されている」⁽¹⁹⁾と理解されており、後者については上段で引用した箇所がそれに該当する。この理解はハイトマイヤーと熊谷の理解で確認された「アイデンティティ危機」・「価値観の真空状態」現象と明らかに対立する。この対立点こそがネオナチ研究が直面しているいま一つの問題点となっている。

だが、仲井、望田の解釈にも看過することのできない疑問点がみられる。「方向を失っ」ている「極右青年グループ」に「ゲヴァルトそのものを目標」としさらにそれに「アイデンティティ」することが、はたして可能であったか。「とりとめのない観念や怨念の集合」であったスキンヘッズにはたして「敵対的なものと思われた社会集団に対する対抗行動」をとることができたであろうか。

新たな「解釈」の可能性

さて、ここであらためて以上のネオナチ・ユーゲントの行動形成過程分析で未解釈の局面を整理しておこう。社会的危機・精神的危機因からその形成過程が理解されるばあいに、危機の捉え方の相違にもかかわらず、双方ともこれを行動の初発条件とみなしている点で同じアプローチを志向しているといえる。だがいずれの分析者も言及しているように、この初発条件がネオナチ・ユーゲントの行動を生成させるとはみておらず、「極右イデオロギーと結びつく糸口」ないし「西側からきたネオナチの指導者たち」によって組織される要因となったと認められているのである。したがってジューラが指摘する批判点はいまだネオナチ・ユーゲント研究の最大の課題である。

それでは、初発条件とみなされる行動生成因が多数あげられているにもかかわらず行動生成を十分に説明するにはいたっていない原因はいかなる点にあるのだろうか。第1に指摘されなければならないのは、行動生成の分析視座が初発条件から行為が結果するという行動格率の枠組によって構成されている、という点である。第2は、第1の行動格率で行為結果が理解されないために、あらたな要因、すなわち極右グループによるアプローチないし組織化という視点が設定されてくる、という点である。第3は、従って、ネオナチ・ユーゲントの行動はそもそも思想性を欠く、非組織的なものという評価が前提とされている、という点である。要するに行動格率で理解しようとする志向がうまく、分析が規範的になっているということである。しかしながら、アイデンティティ危機・方向性喪失・価値観の真空状態からはたして外国人排斥といった価値に動機づけられた行為は生起しうるであろうか。

仲井と望田はこの問題について一つの仮定を提示した。それによると、ネオナチ・ユーゲントへはしる「予備軍」としての若者（「極右青年グループ」/スキンヘッズ）の存在を認められ、この若者の行為には暴力および他者排他性といった目的志向性が強く、この「世界像」がナチイデオロギーに媒体されたときに若者はネオナチとなったとみられている。だがこの仮定にもブラックボックスが認められる。つまり、そうした目的的な行動へと動機づける〈もの〉へのアプローチはいまだ未着手のままである。実は、この点こそが、上記の課題解決につながる、今日のネオナチ研究上の重要な問題点となっているとみなしなければならない。

そこで、この問題を解釈するために、いま一つ可能な仮定が用意されなければならない。すなわち、これまでの解釈とはまったく逆に、ある価値を徹底的に実践する志向性が強いばあいとその価値に合わない存在を否定し排除する行動との間に相関が認められ、その行動グループの親密性も強固である、という仮定も可能であろう。さらにこの価値が市民的なそれを共有していたとするならば、その行動が潜在的な社会的支持を得ているという理解も可能である。それではこうした仮定はどのような事実によって検証されることができるのか。最小限必要なことは、上記の行動生成因が若者の日常生活世界において現れる意味連関を解釈学的に理解し、その意味連関からネオナチ・ユーゲントの行動が形成される過程を追跡することである。そのためには若者のその日常生活世界をできるだけデータにそくして描きだすことが不可欠な作業となる。

2. 転換期前後の若者の日常生活世界

(1) アイデンティティ「危機」・方向性「喪失」

1991年時点における旧東西ドイツ青年の意識調査がシェル株式会社青年研究所によって実施された（被調査者は全ドイツから4000人が無作為抽出される）。それによると、青年は、「1981年時点で依然として支配的であった深い悲観主義」にかかわって、「将来を楽観主義的にみている」。1980年代は、東西対立、核戦争の危機、ミサイル配備といった「危機社会」に対応するかのように旧東ドイツではネオナチグループの活動が活発になり、89年にはベルリンの壁が解放される。とくに旧西ドイツ青年の50パーセント以上は将来を暗くみていた。ところが、10年経った1991年になると、15歳から24歳の若者のうち旧西側では71パーセント、旧東側では76パーセントが楽観主義に変わっている。そこで次にいくつかの興味ある調査項目の結果について簡単に列挙しておこう。(1)サッカーの暴力的なアシストに対して全体の89パーセントは否定、(2)スキンヘッズに対して全体の82パーセントは否定、(3)オカルト集団に対しては全体の59パーセントは否定、であった。これに対して既成政党に対する評価は厳しい。(4)「政治家が支持者の問題に何ら関心を示さない」と考える若者は旧西側で64パーセント、旧東側で62パーセントであった。また、(5)「住民は政治家によってまったく欺かれている」とみている若者は旧西側で81パーセント、旧東側で84パーセントにも達していた。ところが政治的関心度については、(6)旧西側の56パーセント、旧東側の62パーセントは政治に関心をもってしていると回答している。次に若者の生活感についてもみておこう。「自分の生活にとって外面的にもっとも重要なこと」に、(7)世界の平和をあげた若者は旧西側で77パーセント、旧東側で84パーセント、(8)真の友情をあげた若者は旧西側で68パーセント、旧東側で73パーセント、(9)自由をあげた若者は旧西側で66パー

セント、旧東側で62パーセント、(10)家族の平和をあげた若者は旧西側で57パーセント、旧東側で79パーセントであった⁽²⁰⁾。

さて、先述したように極右・ネオナチの発生因は、「危機社会」に起因する若者のアイデンティティ危機、「価値観の真空状態」に起因する方向性の喪失に求められてきた。アイデンティティ危機と方向性喪失が、その主因かどうかについてはいますこし脇におくとして、若者に共通し、しかもアイデンティティを求め・方向性を得ようとする志向性が極右・ネオナチに吸収されやすいかつされた、という見方は内外をとわずほぼ了解されている⁽²¹⁾。ところが肝心なアイデンティティ危機と方向性喪失については、理論上からの規範的推論の次元にとどまり、いまだ十分な検証を経ていない。このことは上記の調査からも明らかである。すなわち「自分の生活にとって外的にもっとも重要なこと」として、第1に世界の平和、次いで真の友情、家族の平和と続いているが、このデータ自体は、1991年時点におけるドイツの若者が、世界一友人一家族という世界を強く志向していることを如実にうかがわせているからである。そこで以下ではその危機と喪失がもっともドラスティックに顕在化したとみられている旧東ドイツのデータから、この実態を検証してみたい。

最初に調査について簡単に注記しておこう。調査はライブチッヒの青年中央研究所が社会主義統一党 (SED) の統制から全く自由になって実施された最初のものである。各調査の種類は表1に示すとおりである。表2より1990年4月の調査でヨーロッパ人としてのアイデンティティ

表1 調査種類⁽²²⁾

種類	調査期間	被調査者	年齢
DDR I	1989年11月20日 ^a - 11月27日 ^b	1,578 ^c	14歳以上
DDR II	1990年1月29日 - 2月9日	1,769	
DDR III	1990年2月26日 - 3月6日	1,307	
DDR IV	1990年4月18日 - 4月27日	1,493	

表2 ヨーロッパ人としてのアイデンティティ⁽²³⁾

	「わたしはヨーロッパ人と思っています。」			
	はい完全に	はいかなり確かに	いいえ元々ありません	いいえ絶対にありません
DDR I	52%	34%	11%	3%
DDR II	52	35	11	2
DDR IV	43	41	12	4

イをもつ被調査者は84パーセントである。このうち学生についてみると「ヨーロッパ的な思考」をもつ学生 (学生全体の60パーセント) がこのアイデンティティを代表していた⁽²⁴⁾。この数字は、世界の平和を「自分の生活にとって外的にもっとも重要なこと」こととする割合84パーセントと対照すると、1989年9月のライブチッヒ月曜デモ、11月のベルリンの壁崩壊といったドイツ統一直前の激動期を経た後でも、旧東ドイツの学生がヨーロッパ的な思考を志向して

いたことを示している。ところで「ヨーロッパ的な思考」とは一体いかなる内容のものか。これについては調査結果から明らかになしえないので、別のデータから推定してみたい。それは1989年11月のチェコスロヴァキア「革命」に参加した学生の主張である。その該当箇所をまず再録しておきたい。「私たちの革命は、思想の革命だったと思います。僕たちは政治家ではない。でも、思想はもっていた。思想が大きな力を僕たちに与えてくれ、この革命を始めたのです。」(その思想とは)「自由と民主主義のようなものです。全人類の思想ですよ。」(ロマン・クシーシ、カレル大学法学部、28歳)⁽²⁵⁾。

このロマンの主張にみられる「全人類の思想」が旧東ドイツ学生の「ヨーロッパ的思考」と

ほぼ同一のものとみなされる。この想定にもとづくならば、旧東ドイツ学生のヨーロッパ世界へのアイデンティティは一種の興奮した情動的なものではなく、思想性をもったものであると考えられよう。それではドイツおよび東ドイツに対するアイデンティティの状況はどのようになっているのか。表3によると、1990年以降東ドイツ市民としてのアイデンティティが激減していくことに目を奪われる。ところが、これに対して、ドイツ人としてのアイデンティティについては顕著な変化はない。次に若者についてみると、DDR Iの時点で、その71パーセントは無

表3 ドイツ及び東ドイツへのアイデンティティ⁽²⁶⁾

	「わたしは～として感じています」			
	はい完全に	はいかなり確かに	いいえ元々ありません	いいえ絶対ありません
ドイツ人として				
DDR I	76 %	21 %	2 %	1 %
DDR II	80	17	2	1
DDR IV	71	23	4	2
東ドイツ市民として				
DDR I	76 %	18 %	5 %	1 %
DDR II	53	25	14	8
DDR IV	51	28	13	8

条件で東ドイツにアイデンティティをもっていた。ところがDDR II/IVになると、この割合は49パーセントと減少する（生徒と職業訓練生—10年制総合技術学校を卒業した労働者予備軍—は43パーセント⁽²⁷⁾）。さらに続けて15—16歳の生徒について東ドイツに対するアイデンティティをみると、その項目中の最高得点は「家族/友情」、次点は「故郷」であった⁽²⁸⁾。

以上の調査データより理解されうる事柄は、第1に旧東ドイツの若者がヨーロッパドイツの「平和」とった普遍的な思想的価値を強く志向し、第2に弱年齢層では家族/友情といった世界に対するアイデンティティが強く、第3にその中間の世界である東ドイツに対するアイデンティティは1990年の転換以降激減した、という点である。第1と第2の点からすると、旧東ドイツの若者にアイデンティティ危機がみられるという結論は得られない。また方向性喪失についても同様で、ヨーロッパ的な普遍的価値が志向されているといえよう。

(2) 崩壊が進む家庭生活

1993年3月に旧帝国議会内で「社会における暴力」をテーマとした政治家・有識者による円卓会議がもたれた。ここで共通認識となったものは日常生活における全般的な失業不安・急激な変化と家庭内暴力の増加に因果的関係がある、という点であった⁽²⁹⁾。極右・ネオナチの暴力発生因を家庭生活の機能変化に求める見解も非常に有力な潮流をなしていた。1993年1月に発表されたシェル株式会社青年研究所の調査（被調査者は360名の生徒：記述式回答）結果はこの見解を強力に支持するものであった。

調査結果によると、失業が旧東ドイツの「新たな社会的大衆現象」となっていた。何人かの被調査者の回答の一部を転載しておこう。女生徒(12歳)「私の両親は帰宅すると、いつも機嫌が悪い。私はその理由を知っている。両親は毎日仕事が終わることに不安を抱いている」。女生徒(12歳)「劣悪な経済状態によって、いま私たちの家族は離れ々々になって生活している。父は農場で働いていたが、1990年以降カッセルで運転手をしている。父は全部で14日家に帰っただけ」。女生徒(13歳)「私たちの家族の生活はあの変化以降もはや正当に機能していない」。女生徒(12歳)「私の両親は例えば食事の時に仕事について話し、もう私や兄が話す時間はなくなった」。女生徒(16歳)「家で私たちの話のテーマが変わった。母は54歳で、退職させられるこ

とを心配している」。女生徒（17歳）「家族がだんだん崩壊していく、そう望んでいるわけではないのに。私は母子家庭。母はくたくたになるまで働き、どうにか生きていくにすぎない。家に帰っても働けないほど」。女生徒（12歳）「あれ以来母は失業し、快活さを失って、妹や私に別人のようにとても辛く当るようになった」⁽³⁰⁾。このような家族の情緒的関係の喪失は家族関係にいかなる変化を惹起しているのか。GEW（教育者・研究者組合）がライプチヒ市周辺の29校のギムナジウム生徒を調査した結果によると、49パーセントが家庭で両親と会話ができない状況になっており、「テレビの前に沈黙」が支配していた⁽³¹⁾。

表4 脅迫感⁽³²⁾

「あなたはご自分の失業の可能性にどのていど脅かされていると感じていますか?」	強く			
	強く	どちらかというど強く	どちらかというど弱く	弱く
DDRIV	21%	27%	33%	19%
労働者				
男性	15	28	37	20
女性	32	28	29	11
15-24 歳	29	26	28	17
25-44 歳	19	28	37	16
45-64 歳	19	30	30	21

失業ないし失業不安によって家族の情緒的関係と対話が崩壊せしめられていく深刻さが、当事者の生の声であるだけに、伝わってくる。このような事態はどの程度ごく普通の家庭にも進行し、「新たな社会的な大衆現象」となっているのか。これを表4のデータから推定してみよう。これによると、25歳以上の年齢層で47/49パーセントは失業不安に脅かされたいたことに

なる。約半数弱の家庭で上記のような変化が生じつつないしは進行しつつあったものと推定されよう。

このように家庭生活の崩壊化は家族関係に深刻な作用を及ぼしていた、とみてよいであろう。だがここで力めてに留意すべきは、この作用がストレートに若者を外国人排斥に象徴される極右主義へ同調ないし参加する要因とみなしてはならないことである。家庭の機能が旧東ドイツ時代以降も維持されている場合においても、その若者が極右主義へ同調する傾向がみられるという事実も存在するのである。その一例をあげておきたい。

「ノイブランデンブルクおよびグライスヴァルトにおける青年の行為素因」報告（研究代表者 L. ゴルツ、被調査者数はノイブランデンブルク410名、グライスヴァルト407名、年齢は14—18歳）によると、1991年時点で、被調査者の家庭は「まだもっとも強力な社会化」の機能を維持していたが、その政治的傾向は次のようであった。55パーセントは政治的に無関心であったが、グライスヴァルトの被調査者の16パーセント、ノイブランデンブルクの被調査者の23パーセントは極右の運動に同調していた。また外国人にたいする反感は前者で29パーセント、後者で39パーセントであった⁽³³⁾。

(3) 学校内暴力の日常生

家族の情緒的関係と対話の喪失が暴力を生み出し、それが極右・ネオナチの暴力を容認する社会心理的雰囲気になっているという見方は、これまでのデータからでは読み取れない。かといって社会心理的雰囲気になっていないとも断言できない。そこでこの関係をさらに追跡しなければならぬが、その前に、極右・ネオナチの行動に対する危機感について調査結果をみておきたい。表5は、1990年4月の時点で、68パーセントが極右・ネオナチの行動に日常的に危

表5 極右急進主義の拡がりに対する個人的な圧迫感⁽³⁴⁾

「あなたは極右急進主義の拡がりによってどの程度脅かされると個人的に感じていますか?」	強く どちらかというが強く どちらかというが弱く 弱く			
	強く	どちらかというが強く	どちらかというが弱く	弱く
DDRIV	33%	35%	23%	9%
労働者				
男性	29	33	26	12
女性	37	37	19	7

機感を抱いていること物語っている。それでは若者の場合はどうであろうか。以下では、若者の日常生活において、暴力はどこでどのように現れているのかについていくつかのデータをしめしてみたい。最初に興味をひく調査結果から見ておきたい。

GEWの機関誌『メタル』は子

どもたちに、「暴力一体験、不安、解決策」のテーマで作文コンテストを実施した。応募者総数は440名（7—14歳）、内60パーセントは新州（旧東ドイツ地区）から、64パーセントは女性であった。何通か紹介しておきたい。12歳男性「僕たちは遊ぶものがない、休日でお金のかからないことをしています。僕たちは家の前の戸外に集まっていると、大人たちによって叱られてしまう。僕たちが何もしなくても。大人たちはいつも怒っていて、僕たち子どもを追っばらう」。8歳男性（校庭での体験）「多くの子どもたちはポケットナイフやガスピストルを持ち歩いています。4年生のある男の子は1組の教室で撃たれました。一組の人たちの目は充血していました。幸運にも撃たれた人はまだ目がみえました。4組の人たちは下級生を脅してお金をあさっています。その他にも彼らは下級生を集団で殴っています。僕は暴力を憎んでいます!」。13歳女性（「可愛らしい、知性的な同級生」について）「彼女は女の子全員から尊敬され男子からも一目おかれていました。授業で男女同権のテーマで議論したとき、彼女は男子の乱暴な女性蔑視の主張に激しく反論しました。彼女はその後で男子たちによって男子便所に無理やり連れ込まれて衣服を脱がされて、強姦されました。それ以後彼女はとても変わってしまいました」。12歳男性（外国人）「暴力ということで僕はただ一つ、外国人に敵対するドイツ人をあげます。ドイツ人は僕たちをどこでも追い回します。学校、遊び場、街で。要するにどこでもです」。この作文審査にあたった審査員（上掲 W. ハイトマイヤー教授、医師、精神療法医 H. ペトリおよび児童文学者 K. ポイエ）は一致して、「異常な大変動があって、そこから暴力が生まれているのではなく、それはほとんどの場合普通の日々の日常性から生まれている」と指摘していた⁽³⁵⁾。この指摘を了解しうるためにはさらに学校内暴力の実態について知らなければならない。

最初にベルリンの調査結果からみておこう。当市の「集団暴力調査グループ」（青少年の暴力行為について論議するために1990年に創設されたフォーラムで、警察犯罪委員会が主催する、代表は W. ツィルク氏）の調査によると、青少年の集団暴力事件は1990年で6,036件、1991年で5,683件であった。これに対して学校内事件は1992年で230件と少なかった。この理由として犯罪委員会は、「ベルリンの学校では教師の権威がまだ相当に存在している」点を上げているが、しかし同時に学校内での集団暴力はようやく明るみにだされている段階で、未報告件数はかなりの数にのぼっているであろうことも認めている。さて犯罪者（全て男性）の年齢をみると15パーセントは21—25歳、35パーセントは18—21歳、45パーセントは14—18歳、5パーセントは10—14歳であった（これらの犯罪者全体の69パーセントは就学該当者である）。これと並行して実施されたフンボルト大学の調査研究では14歳以上の生徒の35パーセントが学校に催涙ガス銃かナイフを携帯していた⁽³⁶⁾。ここで留意すべきは、これらの集団暴力の被対象者が即外国人で

はない、ということである。次に教室内のデータをあげてみよう。

ここにザクセン州ケムニッツ市（旧東ドイツの工業都市）のミッテルシューレ（1992年8月以降旧総合技術統一学校より移行）の第6－9学年309名に対する学校心理相談員の調査データを上げておきたい。まず注目されるのは、教師－生徒関係について双方の評価に著しい齟齬がみられたことである。教師はその関係を全般的に「良好」と評価していた。一方生徒側の評価は厳しいものであった。3/5以上は、教室で良好な学習が行われているとする評価を否定すると同時に静かさと協調が欠如していると批判し、さらに授業の妨害はその典型的な現象である、と回答していた。暴力の存在については双方とも認めていた。生徒の3/5は同僚どうしの殴り合いのみならず、言葉と行動で教師に反抗する現象も指摘している。次に外国人にたいする態度をみると、76名は外国人排斥を支持し、112名はとどまるべき、137名はさらに強く外国人に留まる権利を認めていた（41名は回答なし）。外国人排斥を容認する生徒が25パーセントであるのは学内の状況と対照すると意外にすくない印象を与えられる。学校心理相談員は以上の結果が生じた背景について、西側の価値多元主義に対する不適応と家庭における（両親の失業による）ストレスの強化をあげ、とくに後者と関連して帰宅後生徒の多数がテレビとビデオの前に釘付けにされている状況も指摘している（旧東ドイツ時代には帰宅後官製のスポーツクラブや自由ドイツ青年団等で活動していた）⁽³⁷⁾。本データについてここでも指摘しておかねばならない点は、学校内の暴力化傾向をストレートに外国人に対するそれと同一視してはならないことである。その潜在的な可能性が予測される以上のことはいえないのである。

(4) 価値多元主義にたいする不適応

ここでさらに前者の価値多元主義にたいする不適応について別のデータから検討を加えておく必要がある。上掲した1993年1月のシェル株式会社青年研究所の調査によると、被調査者335人（N=339人）84パーセントは旧西ドイツの若者との直接的なコンタクトを依然としてもっておらず、約70パーセントは旧西ドイツ側の図書館や酒場に入ったことがない、と回答していた⁽³⁸⁾。ところがその一方では、後述されるように、「勤勉・規律・秩序・清潔」といった価値に対するアイデンティティは非常に強い。これは同時に旧東ドイツの「最高の価値」でもあった。こうした価値観は、管理主義的な教師－生徒関係のもとで徹底的に強化されていた。その管理主義の極端な一しかし日常的な一体制についてもついでに言及しておかねばならないであろう。筆者にとって驚くべきことは、学校教師のシュタージ（旧東ドイツ国家保安者）非公式メンバーが告発されたことであった。ガウク機関（ベルリンのシュタージ調査機関）は1,800件の告発の調査を実施し、その結果10名が解職された。その中には父兄と子どもたちから好かれている「優れた」教師も含まれていた。かれらの行為例をあげてみよう。ある教師は生徒（告発者）の私生活と友人関係について500頁にもわたる詳細な情報を記録していた。ある女性教師はかのじょを信頼していた16歳の女子生徒の詩集をシュタージに送った。また別の女性教師は16歳の男子生徒の「反国家的な発言」をシュタージに報告した。その生徒はシュタージ機関に呼び出され、5時間にわたる尋問の後、スパイを強要された。かれは大変なショックをうけ、長期の病にかかった⁽³⁹⁾。シュタージの非公式メンバーが学校に1名配置されているだけで、その情報管理は十分達成される。その摘発は告発者によって着手され、それが認定されるには長時間を要するのみならず悲劇ともなう。しかしその存在の拡がりについてはもはや否定するものはいない。こうした個人の私生活と学校での発言にまで管理が及ぶ徹底的な教育システム

で旧東ドイツの「最高の価値」でもある「勤勉・規律・秩序・清潔」が実践されたことに注意がむけられるべきである。このような「価値」が実践されている授業風景にもちょっと目を転じてみよう。旧東ドイツのゲラにあるペスタロツィ学校（正式校名）の教室はどの生徒も全く同じように背筋を伸ばし、手を机の上に組んで、静かに考えていた。こうした学校を旧東ドイツ時代に日本の県単位の教員研修グループ（小中学校教師・校長・指導主事を含む）は視察を指定される。その教師たちは生徒指導が非常に行き届いている、と一様に高く評価する。研修グループの通訳を担当したギムナージウム教師水野博子さんはこのように筆者に語った。その県名をたずねたところ、そこに日本でもいわゆる管理教育で名をはせている県が含まれていたことはいままでのない。

価値多元主義が本来旧東ドイツ時代の「価値」一元主義と対極をなすものであり、後者は社会主義の崩壊とともに解体した、ということも識者および行政にはほぼ共通に認識されている。その一例として『デア・ターゲスシュピーゲル』紙がザクセン＝アンハルト州文部次官ヴォルフディーター・レガル氏にインタビューした当該箇所をあげておきたい（Iはインタビューを示し、「」内の「…」は引用者による省略）。I—「社会主義は崩壊し価値を喪失してしまいました。新たな世界観が存在せず、子どもたちは宗教のないところで教育されています。価値多元主義は、習得されるまでに、長時間必要です。どのくらいかかるのでしょうか。」／レガル氏—「東ドイツ当時の学校で「…」子どもたちが教えこまれたことは、同じ考えをすることで、違った考えをすることは評価されませんでした。自己批判や他者批判を欠いていました。私たちはいま学校生活における自由、とりわけ自主性を確立するための自由ならびに価値多元主義と共同決定を重視しています。「…」当然に多数のり越えなければならない壁が横たわっています。とくに大変なのは私たちの生徒の価値体系全体が崩壊したことです。生活のための新たな方向性を作りあげることは学校の責任です。「…」私たちは、おそらく4年、5年、6年は必要とするでしょう。」／I—「ザクセン＝アンハルトにおいて右翼急進主義の危険はどのていどでありますか。」／レガル氏—「私たちの生徒は一面では家庭から確実に影響を受けています。他面では規範と価値の知識が真空になっており、この真空状況で生徒はスローガンやパロールを非常に受け入れやすくなっています。「…」私は確かにいまこのような真空状態で、メディアが無制約に私たちの子どもや若者に影響を及ぼしていることを考えあわせると、危険が増えているとみています。この影響を物語るのにはアングラ情報によってナチズム関係の映画が上演されていることです。それは子どもたちの感情を興奮させたり情報を与えて、予期しないかたちで暴力を振るう引き金となっています。暴力は当然に右翼急進主義グループのパロールとともに子どもたちのアイデンティティのなかに入り込んでいます。」⁽⁴⁰⁾

ここで明らかなように、価値一元主義の崩壊＝価値多元主義に対する不適応、すなわち価値の「真空」状況が極右主義・暴力との間に因果関係が存在する、という理解が双方に共通してみられる。この見解は、繰り返すが、当時あって有力な世論となりつつあるものであった。さらに例をあげれば、1993年2月の自由民主党（FDP）の党大会でネオナチと「価値の真空」との関係が懸念され⁽⁴¹⁾、さらにこのインタビュー直後でも、ベルリン工科大学 M. カッペラー教授から「全ての人たちが暴力の増加と価値崩壊について語っていることなど過去にあったであろうか」⁽⁴²⁾と発言されていたのである（先述した旧帝国議会内閣卓会議時の主張）。だが、この見解ははたして若者の文化的状況を説明することに成功しているであろうか。

「価値の真空」状況と家庭内ストレスがとくに学内における集団暴力の引き金となっている

としても、これがはたして外国人襲撃の原因とみなされうるであろうか。この説明は、アイデンティティ危機+方向性喪失⇔外国人襲撃+極右主義の関係分析とともに、きわめて規範的であり、ジャーナリズムを介して、1992/93年には、一つの公論になりつつあった。この公論は、その現実と無縁であると思っている市民たちにとって分かり易いのみならず、同時に無縁であることを再確認させさらに安堵感を与えたばかりでなく、その一方で若者たちの行動にたいして反対も賛成もする振る舞いに正当性を付与してしまったように思われる（とくに後者については、いずれも改めて後述されるが、1992年8月22日のロストック難民収容所への極右・ネオナチの襲撃時に2000人近くの市民が心情的にこの行動を支持しており、さらに同年10月に北ドイツの小都市クヴェッドリンブルグでの同様の襲撃事件でも全くおなじ光景がみられた）。

しかしながら以上の認識にもかかわらず、実際に学内で暴力を振るう生徒がそのまま極右主義に同調ないし外国人襲撃に向かったことを提示する追跡調査結果は現在のところまったく不十分であるといわなければならない。ここで別のデータもしめしてみよう。ベルリン市のオーバーシュールラートは、1992年12月段階で、ベルリンの若者の約9パーセント（内2パーセントは女性）が極右主義の傾向を示し、その内2パーセントが極右主義組織メンバーであると報告している。しかしさらに多数が潜在的に極右主義に同調しており、じっさに勧誘されている、ということも指摘された。この報告では、こうした若者たちが極右主義に同調し組織メンバーに入る重要な要因として、ナチズム関係の映像を媒体としてかれらがナチズムに自己同一化していく点があげられている⁽⁴³⁾。すでに明らかのように、この分析は上述したザクセン＝アンハルト州文部次官ヴォルフ＝ディーター＝レガル氏のインタビューでもみられた（「アングラ情報」によってナチズム関係の映画が上演されており、それは子どもたちの感情を興奮させたり情報を与えて、予測しないかたちで暴力を振るう引き金となっています）。これらの報告では、明らかに、若者が極右主義に同調したりその組織メンバーに入る媒体となったものがナチズム映像との接触であったことをしめすものである。

註

- (1) 上山安敏『世紀末ドイツの若者』講談社、1994年、263、255頁。
- (2) トーマス・マン『ドイツとドイツ人』青木順三訳、岩波文庫、1993年第7刷、35、12、22頁。
- (3) Der Tagesspiegel, 31.12.1992/1.1.1993.
- (4) 望田幸男『ネオナチのドイツを読む』新日本出版社、1994年、20頁。
- (5) 坪郷實「戦後ドイツの極右主義と共和党」『思想』1993年11月号、43-46、61頁。
- (6) 高橋秀寿「今日における極右現象の歴史的位相」『思想』1993年11月号。
- (7) 坪郷實前掲論文、45頁。
- (8) ベルト・ジグラー『今、なぜネオナチか?』有賀健、岡田浩平訳、三元社、1994年、183-187頁。ハイトマイヤーの見解については、高橋秀寿「今日における極右現象の歴史的位相」『思想』1993年11月号、67-68頁も参照。
- (9) 坪郷實前掲論文、49頁。
- (10) ベルト・ジグラー前掲書、186頁。

- (11) 熊谷徹『新生ドイツの挑戦』丸善株式会社, 1993年, 51頁。
- (12) 熊谷徹前掲書, 57頁。
- (13) 熊谷徹前掲書, 52-53頁。
- (14) 熊谷徹前掲書, 59頁。
- (15) 熊谷徹前掲書, 53, 59頁。
- (16) 熊谷徹前掲書, 60-84頁。
- (17) 仲井斌『現代ドイツの試練—政治・社会の深層を読む』岩波書店, 1994年, 224-226頁を特に参照。
- (18) 望田幸男前掲書, 174-175頁を特に参照。
- (19) 仲井斌前掲書, 226頁。
- (20) Der Tagesspiegel, 4. 11. 1992.
- (21) さらに, 山本知佳子『外国人襲撃と統一ドイツ』岩波ブックレットNo.324, 32-33頁も参照(なお本書の極右・ネオナチ分析は的確で説得力をもっている)。
- (22) Peter Förster, Günter Roski, DDR zwischen Wende und Wahl: Meinungsforscher analysieren den Umbruch, Berlin, 1990, S. 3-4より作成
- (23) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 98.
- (24) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 99.
- (25) 「そのとき, 私たちは恐怖心を失った」チェコスロヴァキア学生の意見, 1990年1月6日プラハにて, 臨時増刊『世界』第540号, 1990年4月, 117頁。
- (26) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 94.
- (27) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 95.
- (28) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 97.
- (29) Der Tagesspiegel, 24. 3. 1993.
- (30) Der Tagesspiegel, 10. 1. 1993.
- (31) Der Tagesspiegel, 26. 3. 1993.
- (32) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 88.
- (33) Der Tagesspiegel, 7. 5. 1993.
- (34) Peter Förster, Günter Roski, op. cit., S. 109.
- (35) Der Tagesspiegel, 7. 2. 1993.
- (36) Der Tagesspiegel, 2. 2. 1993.
- (37) Der Tagesspiegel, 7. 4. 1993.
- (38) Der Tagesspiegel, 10. 1. 1993.
- (39) Der Tagesspiegel, 8. 12. 1992.
- (40) Der Tagesspiegel, 6. 3. 1992.
- (41) Der Tagesspiegel, 16. 2. 1993.
- (42) Der Tagesspiegel, 24. 3. 1993.
- (43) Der Tagesspiegel, 7. 12. 1992.

Die Kultur der Neonazi—Jugend im Modernen Deutschland (1)

Mitsuo MASUI *

RESÜME

Was ist die Ursache von der Entstehung der Neonazi-Jugend im Modernen Deutschland? Man versteht die folgenden Punkten als die Ursache davon : (1) die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels, (2) das zusammenbrechende Familienleben, (3) die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts. Aber können wir die Entstehung der Neonazi-Jugend durch der drei Punkte als entsprechend verstehen ? Ist es denn möglich, daß die zweckmäßlichen Täten, die den Antisemitismus, Großdeutschismus und Gewalt anrichteten, im psychologischen Vakuum und somit ohne den starken Werken hervortreten ? Das alltägliche Lebenswelt der Jugend um Wende bringt uns das ganz anderen Resultat als das schon oben Verstandene.

[Inhaltsverzeichnis]

Einleitung

1. Die Möglichkeit des Verstehens der Kultur der Neonazi-Jugend
2. Das alltägliche Lebenswelt der Jugend um Wende
 - (1) Die Krise der Identität und Verlust des Lebensziels
 - (2) Das zusammenbrechende Familienleben
 - (3) Die Alltäglichkeit der Gewalt in den Schulen
 - (4) Die schlechte Anpassung des pluralistischen Werts (Vol. 15, Nr. 1.)
 - (5) Praktik des <höchsten> Werts
 - (6) Orientierung der starken Weltanschauung
3. Organisationen und Täten des Neonazis
4. Alltäglichkeit einer Neonazi-Jugend

Zusammenfassung

* Division of Foundations